

福祉のひろば

特集

つたえたい

ひと

独りでこどもを育てられない

2

2014



ひろばトーク

おかわ み の り

看護師

小川 美農里さん

「ありのままの自分でもいいんだよ」と伝えたい

編集 総合社会福祉研究所

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町10
代表取締役社長 川下 晃正
TEL (075) 211-7277
FAX (075) 211-7270
<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

社会保障・社会福祉の原理・原則がここにある！

真田是著作集[全5巻]

全5巻セット 普及価格 14,500円 (税・送料込)



- 第1巻 社会問題論
- 第2巻 社会保障論
- 第3巻 社会福祉論
- 第4巻 I 地域福祉と社会福祉協議会
II 民間社会福祉論
- 第5巻 I 福祉労働論 II 社会福祉運動論
III 部落問題論

一巻ごとでも
ご購入いただけます
各巻3230円
(税・送料込)

発行●福祉のひろば (書店ではご購入いただけません)

インターネットで「福祉のひろばオンライン」⇒「書籍」を検索してください。

お支払いは便利なカード決済で。▶お問合せ先 TEL・FAX06-6779-4955



はきものは必ず
下駄箱に入れて鍵をかけて下さい

浴育(よくいく)……

“よく行く”ではありません。銭湯の持っている機能が、人を育てる力になるのです。本誌に「なにわ銭湯見聞録」連載中のラッキー植松さんは、
“銭湯は無防備で平等な究極の平和空間です”と訴えます。



ある銭湯の解体現場です。昨年11月30日の「第5回ひろばセミナー 銭湯からみえる、ひと・まち・くらし」当日も、大阪市内で銭湯が1軒、最後の日を迎えていました。地域の公共財として見直されている銭湯ですが、ラッキーさんは「いま、現にある銭湯の良さを知ってもらいたい」とサポーター活動を自主的に行っています。



写真上は、ラッキーさんが画かれた銭湯の姿（銭湯めぐり1010か所が目標）。下は、「第5回ひろばセミナー」でのラッキーさん（左）と浜岡政好さん（右。佛教大学名誉教授、総合社会福祉研究所副理事長）。



「第5回ひろばセミナー」では銭湯をイメージして富士山の絵と湯船を即席に作成。しかし、大阪の銭湯には富士山の絵はほとんどなく、モザイクタイルが多いとのこと。銭湯のペンキ絵を描く絵師は東京に二人ほどしかいないらしい。(写真・1～2ページめはラッキー植松さん提供。3～4ページめは申佳弥 文・下野祇園 関連記事47ページに掲載)

【ひろばトーク】

「ありのままの自分でいいんだよ」と伝えたい 小川美農里 6

●特集● つたえたい 独りで こどもを育てられない

- ① 増える、妊婦健診を受けない・受けられない母親たち 10
- ② 見守り、待つ 子どもの誕生
——助産師 佐藤よし子さんに聞く 13
- ③ 保護者の心の支えとなる病児保育
——西成民主診療所病児保育室「まつぼっくり」 17
- ④ 発達・成長する子と母の生活を支える夜間保育 22

●トピックス●

学校給食費未納にみる「子どもの貧困」

——未納は保護者規範の低下か 小川 敏行 26

住民と自治体との協働で取り組む あやべ水源の里を訪ねて
西村 憲次 32

労働相談からみえる未組織福祉労働者の現状と組織化の展望
澤村 直 40

第5回「現場を励まし 元気がわく ひろばセミナー」報告 47

●連載●

フォーラム

平和と省エネを日本の専売特許に 細貝大二郎 54

連載 小川政亮 第二部 自伝 (23) 小川 政亮 56

「埼玉大学、そして脳梗塞を克服して」

相談室の窓から 青木 道忠 60

「一番」でないとはダメですか

わらじ医者 早川一光の「よろず診療所日誌」 早川 一光 62

育つ風景 職場の風通し 清水 玲子 64

いっぽいっぽの挑戦 (11) 繁澤 多美 66

主体性を引き出す支援とは

映画案内 『小さいうち』 吉村 英夫 68

現代の貧困を訪ねて 生田 武志 70

「岸和田市の生活保護申請(却下)の取り消しを求める裁判」が完全勝訴

なにわ銭湯見聞録(拾) ラッキー植松 72

いただきます! 豊里学園 74

簡単・低カロリーで食物繊維もとれる! 里芋トリュフ

ホームレスから日本を見れば ありむら潜 76

花咲け! 男やもめ 川口モトコ 77

福祉のひろば

2014年2月号

●表紙の絵●
神門やす子



●カット●
川本 浩

みんなのポスト 52 / 今月の本棚 48 / 福祉の動き 78

●グラビア● 浴育——第5回 ひろばセミナー「銭湯からみえる、ひと・まち・くらし」

「ありのままの自分でいいんだよ」と伝えたい

おがわ み の り
看護師 小川 美里さん

小川美里みのりさんは、小川政亮まさあきさんの孫です。大阪市西成区の釜ヶ崎でボランティアとして活動をされているとうかがい、お会いしました。

みのりさんの父親は、農業研究者です。専業農家をはじめた自然豊かな福島県喜多たかた方市で、みのりさんは育ちました。

「テレビはNHKとBSしか映らず、父は自然保護活動などもしていたので、ちよつと変わっていました。普通は『人に迷惑をかけてはいけない』と親に教えられると思うのですが、私は父に、『人に迷惑をかけてもいい。それ以上のことを成し遂げなさい』と教えられたことが印象に残っています。そんな変わった父なので、小さい頃は学校に行って友だちと違うのがすごく嫌でした。ひと目を気にしてありのままの自分を出せず、ともしんどかったです」とみのりさん。

高校生のときに学校のフィールドワークで初めて釜ヶ崎を訪れ、夜回りをしました。「寒くないですか」と声をかけながら毛布を配っていると、一人のおっちゃんに「寒くないわけないやろ!」といわれ、そのことがずっと心に残っている、と話します。

そりゃそうだ、寒くないわけない。こんな現状が日本にあるんだ——。それから、「自分の原点は釜ヶ崎だ」と、ひんぱんに釜ヶ崎を訪れているそうです。

人とコミュニケーションがとれて、人の役に立つ仕事につきたいと看護学部に進み、貧困問題や社会問題を学んだり海外ボランティアなどにも参加しました。そして、座学ではなく自分の目で確かめたいと、一年間休学して世界をまわることを決



おがわ みのり

29歳。看護師。看護学部在籍時に1年間休学し、医療ボランティア等をしながら約10か月かけて一人で世界中を放浪。帰国後は自身の体験や世界の現状を教育現場やさまざまな講演会で報告。現在は聖隷^{せいれい}三方原^{みかたはら}病院で看護師をしながら、月1回、大阪市西成区の釜ヶ崎で唯一ある訪問看護ステーション「ひなた」で健康相談をする。

座右の銘は、「Be the change」。「Be the change you want to see in the world（世界に変化を望むなら、あなた自身がその変化になりなさい）」というガンジーの言葉から。

意。「『世界を変えなければならない』とあって世界一周をはじめましたが、ボリビア、コスタリカ、社会主義国のキューバ、エチオピア、ケニアなどいろんな国をまわって現実を見て、さまざまな価値観にふれるなかで、『どうあるのが良いのか』がわからなくなりました。でも、旅の最後に訪れたインドで『しなければならぬ』ではなくて、自分自身が行動し、変わっていくことで自分の周囲が変わっていく、世界が変わっていくんだと気づいたんです。それから肩の力が抜けました」

そして、「多くの人と接し、おたがいの夢や宗教、政治について語り合うなかで、自分はあるのままでいいんだと思えるようになりました。自分が自分でいいと思えることがとても大切で、自分を承認できることで他者も承認できるようになると気づいたんです」と話します。

学校や講演会で話をするときには、最後に必ず「自分のことを好きでいいんだよ」というメッセージを伝えるようにしているそうです。自分自身を承認できる、もっと自分のことを好きになれるきっかけを、いろいろな活動を通してつくっていきたい、と話してくださいました。

「ありのままの自分を出すことは、勇気が必要です。否定されるのではないかと評価されるのではないかと、自分をつくってしまいます。だけど、他人と違うあなたの個性は、とても美しく輝いています。そんな輝くあなたに、私は逢いたいし、あなた自身に、出逢ってほしいです。生きていてくれて、ありがとう。」

(聞き手 申 佳弥)

特集

つたえたい

ひと 独りで こどもを育てられない

こどもが安心して、そして安全にすごせるのは、おかあさんが安全で安心してすごしているかにかかっています。ルポライターの杉山春さんは、「私は一人では子どもは育てられない」と伝えることができれば、子どもたちは無惨に死なずにすんだ。（中略）それを語る力があれば、つまり彼女（母親）が信じる『母なるもの』から降りることができれば、子どもたちは死なずにすんだのではないか。そう、問うのは酷だろうか」と叫びます（『ルポ虐待 大阪二児置き去り死事件』ちくま新書、二〇一三年九月）。

この事件は、二〇一〇年夏に、三歳の女兒と一歳九か月の男児の遺体が大阪市内のマンションで発見され、その後、母親は高裁で三〇年の判決を受けます。「少なくとも、母親だけが子育ての責任を負わなくていいということが当たり前になれば、大勢の子どもたちが幸せになる」と杉山さんは締めくくっています。



本誌では毎年、「子どもの貧困」を特集のテーマとして掲げてきました。ここでは、こどもたちが安心して、安全に暮らせるには、特に母親が安心して、安全に暮らせていることが必要だと伝えてきました。子どもの貧困は、親の貧困と直結しているのです。

和歌山県田辺の助産師、坂本フジエさんは、いのちの不思議と重さ、初めて出産・子育てに向き合うおかあさんの戸惑いや不安に寄り添う姿や、おかあさんとしてのからだのケアとその時の家庭の位置などを以前本誌で話されました（二〇一一年三月号）。この日本で、地球で生まれてきたいのちが、宝として育まれることはできないのでしょうか。